

## 大腸内視鏡検査・治療における検査前日の家庭食と便残渣との関連性

荒尾市民病院 外来

谷口 朋子、筒井 直美、村上 美雪、齋 智洋

### 【はじめに】

A病院では、検査・治療前の腸管洗浄度向上の目的で、2020年より検査食が導入された。検査食は個人負担が発生することや、主治医の方針などから購入を強制できず、実際に検査食を摂取し検査・治療を受ける症例は全体の2割程度であった。残りの8割の症例は家庭食を摂取しているが、説明通りに摂取できているか確認は行っていないのが現状である。便残渣をなくすためには、検査前日の食事が重要なポイントであるが、検査食の摂取が少ないため、家庭食摂取内容と便残渣の関連性を明らかにする必要があると考えた。

### 【研究目的】

大腸内視鏡検査における検査前日の家庭食（低残渣食と低残渣食以外）が便残渣に影響を及ぼすかを明らかにする。

### 【研究方法】

1. 研究期間：令和2年8月～11月
2. 研究対象及び方法：検査・治療患者で同意を得た家庭食摂取者230名に対し、A病院倫理委員会の承認を得て、作成した調査用紙を使用し聞き取り調査を行った。
  - 1) (1) 性別・年齢別に、低残渣食を食べている群と低残渣食以外を食べている群にわけ、腸管洗浄度を調査項目別に比較分析する。
  - (2) 低残渣食以外を食べた理由を、低残渣食を知っていて低残渣食以外を食べた群と知らずに低残渣食以外を食べた群にわけ、腸管洗浄度を比較分析する。
- 2) 分析方法：マン・ホイットニー検定を使用し、 $p < 0.05$ を有意水準とする。

### 【結果】

低残渣食を食べている群の方が、低残渣食以外を食べている群より腸管洗浄度が高い傾向にあったが、有意差は認めなかった。低残渣食を食べている群は、年齢70歳未満 ( $p = 0.003$ )・便秘既往なし ( $p = 0.015$ )・常用下剤なし ( $p = 0.037$ )・緩下剤服用1日 ( $p = 0.009$ )の項目で、腸管洗浄度が有意に高かった。

低残渣食を知っていて低残渣食以外を食べた群の方が、知らずに低残渣食以外を食べた群より腸管洗浄度が高い傾向にあったが、有意差は認めなかった。

### 【考察】

高齢や便秘などの腸管洗浄効果が低くなる要因がない場合、低残渣食を食べている群の腸管洗浄度が高かった事で、説明された低残渣食を摂取することは重要であると考えられる。

検査前指導で低残渣食のメニューを知っていて低残渣食以外を食べた群が多かった事は、現在の指導の不十分さが考えられ、今後、指導内容・方法の検討が必要である。

### 【結論】

今回、患者の状態が家庭食が便残渣に影響を及ぼすことがわかった。そのため、患者の状態に応じた個別の指導の工夫をしていく必要がある。